

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成24年5月26日現在

機関番号：10101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2009～2011

課題番号：21652031

研究課題名 20世紀初頭のロシアにおける「古聖像の発見」とその文化的意義について

研究課題名 “Discovery of Old Icons” in early 20 century Russia and its cultural significance

研究代表者

宇佐見 森吉 (USAMI SHINKICHI)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：20203507

研究成果の概要（和文）：

20世紀初頭のロシアにおける「古聖像の発見」を近代ロシア文化の歴史過程に位置づけるために、古聖像が交換の対象となる過程、学術的研究の対象となる過程、美術作品として博覧の対象となる過程、芸術家の美的創造の対象となる過程、国家の文化財となる過程について資料蒐集、文献調査を行なった。調査結果は関連する事象を年譜「古聖像とロシア文化」に整理し、報告書にまとめて刊行した。

研究成果の概要（英文）：

Our purpose of the investigation was to define the meanings of “Discovery of Old icons” in early 20 century Russia and to understand the process that make Old icons the object of exchange, the object of science, the object of aesthetic creativity and the cultural properties that nation protects in the museums. As a result of the survey we published a bulletin with a timetable of historical and cultural facts.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,200,000	0	1,200,000
2010年度	500,000	0	500,000
2011年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	2,200,000	150,000	2,350,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：文学・ヨーロッパ文学（英文学を除く）

キーワード：ロシア文化、古聖像、イコン、ロシア正教、芸術、教会、美術館、文化財

1. 研究開始当初の背景

今日われわれが目にして中世ロシアの聖像のなかには、20世紀初頭になって修復を受け、「本来」の姿に「復元」されたものも少なくない。こうした「古聖像」（近代以前に制作された聖像）の洗浄・修復作業がよ

りシステマテックに行なわれるようになったのは、20世紀に入ってからである。古聖像の洗浄が、礼拝時に付着する油脂や後世の加筆によって、画面の下層に埋没していた中世の画像を色鮮やかに蘇らせたことは、20世紀初頭のロシア社会に生きる人々にとって衝

撃的な「事件」となった。数世紀にわたる忘却を経て「発見」された古聖像は、たとえば、同時代の宗教復興運動にとって、古聖像の「発見」は正教信仰再生運動の原点となっし、新興の前衛芸術運動にとっては芸術的革新の模範と受けとめられた。このように、古聖像の「発見」がロシア文化を更新し、復興に導く重要な文化的精神的基盤として享受された背景には、古聖像を信仰生活の対象とは異なる文脈に組み入れてゆく時代の要請があったと考えられる。著名な聖像コレクションの形成、大規模な展覧会の開催、学術的著作の刊行、教会閉鎖と美術館創設といった事象もまた、この転換の文化的背景をなしている。

ロシアにおける古聖像研究の歴史に関する先駆的業績を残したのは、美術史家ヴズドールノフの一連の著作である。とりわけ、この問題を 19 世紀に遡って詳細に論じた主著『ロシア中世絵画発見と研究の歴史——19 世紀』（1986）は、本研究課題を構想する上で、決定的な役割を果たしている。ヴズドールノフの著作が扱うのは、19 世紀末までにとどまるが、19 世紀の聖像修復事情に始まり、日曜歴史家や聖像コレクターの登場から、博物館の創設、各種の学会設立の経緯に及ぶその内容は、本研究課題が扱うその後の歴史展開を理解するうえでも多くの示唆に富んでいる。20 世紀に関しては、本研究に着手した当初にはいまだ十分な先行研究があるとはいえなかったとはいえ、近年、ビザンチン学者コンダコーフの著作、聖像画・民衆版画収集家ロジンスキイの著作が復刊されるなど、ロシア革命以前の中世絵画研究の業績を再評価する気運が高まっており、トレチャコフ、シチューキンなど、著名な美術品コレクターに関する注目すべき資料の刊行も始まっている。ソ連崩壊後、活発化したロシアで

のこうした研究動向は、本研究課題を遂行する上で有益な材料を提供してくれた。また、革命政権の宗教政策、美術館行政等をめぐるソビエト文化研究の進展、それにもなう基礎資料の刊行も始まっている。これらの資料のなかにも本研究課題が利用しうる材料が少なくない。一方、カンディンスキーによる北方民族の地誌調査旅行（1880）の足跡を明らかにしたヴァイスの著書『カンディンスキーと古きロシア——エスノグラファーおよびシャーマンとしての芸術家』（1995）にも見られるように、「古ルーシ」の「発見」という芸術的イデーの背後に、「考古学」や「エスノグラフィー」に対する知的関心の広がりをつとめる注目すべき取り組みもある。本研究の主題はヴァイスのこうした観点からも着想を得ている。

2. 研究の目的

本研究の目的は、以上のような研究動向を踏まえて「古聖像の発見」という一連の文化事象の意義を明らかにすることである。そのことは同時に、中世の聖像画が、転換期を迎えつつあった 20 世紀初頭のロシアの新しい精神文化の文脈のなかで再解釈され、新たな価値が付与されていく過程を明らかにすることに他ならない。

3. 研究の方法

本研究では「古聖像の発見」の過程を、以下の五つの諸相において解明することを目標とした。第一に聖像画が交換の対象となる過程、第二に、学術の対象となる過程、第三に博覧の対象となる過程、第四に芸術創造の対象となる過程、第五に文化財となる過程である。それゆえ、本研究は美術品の修復の歴史、あるいは中世美術の研究史といった枠組みとは異なる観点に立脚する。ロシアをはじめ、内外の美術史学の豊富な研究成果を利用

することは欠かせないとしても、本研究の考察の対象は、あくまでも「古聖像の発見」の文化的意義に絞られる。

4. 研究成果

(1)古聖像が交換の対象となる過程

聖像が交換の対象となるのは主として二つの要因による。ひとつは 19 世紀に登場した聖像蒐集家たちによるコレクションの成立)、もうひとつは 1905 年の信教の自由拡大にともなう古儀式派による新たな聖堂建設である(Lazarev 2000)。1890 年に開催された第 8 回考古学会ではモスクワの歴史博物館でポスニコフ、シーリンらのコレクションによる古聖像展が開催された。トレチャコーフが聖像を蒐集の対象に含めるのは、この展覧会開催をきっかけにしている。シチューキン家の蒐集家たちが古美術を蒐集の対象とするのもこの時期である(Semenova 2002)。蒐集された古聖像は分類され、交換され、最終的には美術館の所蔵品となった。トレチャコーフやシチューキンはいずれも美術館への寄贈を遺言した。そうでない場合でも、革命後、古美術は接収の対象となった。一方、1905 年 4 月、ニコライ 2 世の命により信仰の自由が認められ、古儀式派の寺院建立が始まると、古聖像を好んだ古儀式派寺院のために骨董市場が高騰した。古聖像の蒐集家や古美術のパトロンが多くが古儀式派の信徒や商人であったことはよく知られている。古儀式派の信徒たちの古聖像への愛着は「古聖像の発見」にまつわる事象と無関係でない。

(2)古聖像が学術研究の対象となる過程

古儀式派が好んだ「古い聖像」は、必ずしも今日で言う「古聖像」(16 世紀以前の聖像)ではない。しかし、彼らは「ビザンツ様式」「ギリシア様式」「古ルーシ様式」などと呼ばれていた近代聖像(実際には西欧的アカデミズム絵画の技法との折衷様式)(Belik

2011)ではなく、ストローガノフ派に代表される 17 世紀以降の聖像を好んで蒐集したことから、聖像の分類や修復の過程に通じていた。聖像が分類や修復の過程を経て学術的評価の対象となってゆく過程は、こうした聖像に通じた蒐集家の登場する 19 世紀から始まっている。一方、「正教、専制、国民性」をスローガンとした帝政ロシアのイデオロギー、古きロシアの幻影を称揚するロマン主義的世界像の浸透、近代化の過程でヨーロッパから導入された考古学や民俗学、民俗誌といった新たな学問の誕生もその背景にある。古聖像が最終的に美術館に収蔵されると同時に、学問的にはロシアにおける考古学からソビエトの美術史学が誕生する。この過程でコンダコーフ、ポクロフスキイ、ムラートフ、グラバーリらが果たした役割は大きい(Shchennikova 2007)。

(3)古聖像が博覧の対象となる過程

聖像が展示物となって博覧の対象となってゆく諸相には、いくつかの節目が存在している。上述の 1890 年にモスクワの歴史博物館で開催された考古学会主催の古聖像展もその一つであり、1913 年 3 月にモスクワ開催されたロマノフ王朝治世 300 年記念「古ルーシ美術」(「正教会考古学」展)もその一つである。前者が世紀末の古きロシアへの眼差しを惹きつけた展示であったとすれば、後者は文字通り「古聖像の発見」と受け止められた(Trubetskoj 1999, Muratov 1923)。この展覧会の開催に合わせて書かれたパーヴェル・ムラートフの一連の著作は、当時の知識人たちの驚きをよく表している(Muratov 1923, 2004)。しかし、古聖像が美術館の所蔵品として最終的な落ち着き先を見つけるのは、多くの場合、革命後である。ソビエト政権の樹立とともにただちに採択された「教会の国家からの分離および学校の教会からの

分離に関する布告」によって、教会財産は国有化され、古美術品は教育人民委員部の管理下に置かれた。教会は閉鎖され、聖遺骸は開封され、反宗教宣伝に利用された(Greene 2010, Igumen Andronik 2008)。このように、革命後の古聖像の接収の問題は、聖遺骸の開封の問題とも結びついている。この事実は本研究開始当初には十分に思い至らなかったことであった。

(4) 古聖像が芸術創造の対象となる過程

古聖像が近代絵画や新興美術のモデルとして芸術創造の対象となっていく過程も、世紀末以来のロシア美術の創造過程と重なっている。初期のカンディンスキイの北方文化に対する地誌的関心(Weiss 1995, Sarab'janov 1998, Aronov 2010)、ヴァスネツォーフら、アブラムツェヴォ・サークルの活動に参加した画家たちの古きロシアに対するネオ・ロマン主義的な関心、レーリヒを初めとする「美術の世界」派の古ルーシを題材とする東方主義的関心(Neklyudova 1991)、ペトローフ＝ヴォトキン(Petrov-Vodkin 2011)、フィローノフ、レントゥーロフ、ラリオーフ、ゴンチャローワ(Goncharova 2002)、マレーヴィチ(Shatskikh 1996)ら前衛美術家たちの新原始主義的関心(Pospelov 1990)。これらの画家たちの創作活動、絵画的主題、モチーフ、平面構成にも「古聖像の発見」のプロセスは長い影を落としている(Spira 2008)。

(5) 古聖像が文化財となる過程

聖像や聖遺物が革命後、美術館の所蔵の対象、文化財として保護の対象となる諸相は、ロシア革命後のソビエト政権による宗教政策、文化政策、美術館行政と切り離して考えることは出来ない。聖像の蒐集家たちはコレクションを美術館に寄贈し、公開することを望んだが、革命政権による教会財産の没収、

教会の閉鎖、聖遺骸の開封は好事家の蒐集とはまったく異なる原理に基づき大規模で広範囲に展開された。「古聖像の発見」に湧いたロシア社会は、わずか数年間に美術品として価値のある古聖像と近代聖像を仕訳し、反宗教宣伝に有益な著名聖人の聖遺骸を開封し、科学的に記録し、そのミイラ化した遺骸を文化財として美術館に収容するという一大事業に取り組んだのである。その過程でパーヴェル・フロレンスキイが唱えた「生きた美術館」論(フロレンスキー 1998)は、聖像や聖遺骸が信仰の場を離れては存在しえないことを主張している。近代の美術館制度のもとでは、聖像も聖遺骸も信仰という文脈から離脱し、死蔵されるほかない。もし古聖像を保存するならば、生きた美術館にほかならない教会の信仰を通じて受け継がれるべきである。フロレンスキイの主張は退けられたが、この熾烈な闘争の過程は近年少しずつ明らかになりつつある。ラドネジの聖セルギイの聖遺骸開封はその象徴的な出来事にほかならない。

(6) 研究の総括と今後の課題

今回の調査結果は関連する事象を年譜「古聖像とロシア文化」に整理し、報告書にまとめて刊行した。今回の調査を通じて明らかになったことのうち、特に強調しておきたいことは、以下の二点である。第一に、「古聖像の発見」は19世紀以来変容を遂げたロシアの近代文化の最初の分岐点に位置していたということである。1913年に開催されたロマノフ王朝300年記念「ロシア古美術」展の開催と、同年に開催された前衛美術家ラリオーフのコレクションによる「ロシア・イコン」展の開催は、ロシアの宗教、美術、政治、社会の各領域で大幅な価値の転換が生じようとしていたことを象徴的に物語っている。第二に、こうした「古聖像の発見」はロシア

革命の勃発により、わずか数年後にもうひもうひとつの分岐点に達したということである。ソビエト政権が依拠した戦闘的無神論は教会財産の没収、教会の閉鎖、聖職者の弾圧を通じて革命後ただちに反宗教宣伝に着手したが、美術史の観点から特に価値があるとされた美術品は保存の対象とされた。ここには共産主義社会における美術館をめぐる革命後の理論闘争の反映もある。こうしたソビエト政権の文化政策については、今後さらに考察を深めていかねばならないだろう。

近代の聖像工房で制作された近代聖像は疑似ビザンツ聖像とも呼ばれる。山下りんが「おばけ絵」と呼んだ近代ロシアの聖像は中世の古聖像ほどの価値を認められないため、ソビエト政権の文化財保護の対象とはならなかった(Belik 2011)。こうした新しい価値観の形成がいかなる政治的動機と結びついてきたかを検討することも、今回の調査を通じて明らかになった今後の課題である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計0件)

[学会発表] (計0件)

[図書] (計1件)

宇佐見森吉、20世紀初頭のロシアにおける「古聖像の発見」とその文化的意義について 平成21年度～平成23年度 科学研究費補助金挑戦的萌芽研究課題番号 21652031 研究成果報告書、北海道大学大学院メディア・コミュニケーション研究院、2012、56

[産業財産権]

○出願状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
出願年月日：
国内外の別：

○取得状況 (計0件)

名称：
発明者：
権利者：
種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

[その他]
ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

宇佐見 森吉 (USAMI SHINKICHI)

北海道大学・大学院メディア・コミュニケーション研究院・教授

研究者番号：20203507

(2) 研究分担者

()

研究者番号：

(3) 連携研究者

()

研究者番号：